

学級経営のあり方を方向づける潜在的要因としての
小学校教師の思考と行動の様式
—文学作品を手がかりとした教師文化に関する探索的研究—

佐藤 郁子

本研究は、教職という職業経験を通して形成される、小学校教師の思考と行動の様式を探索的に追究することを目的としている。それを現在に限らず、近代日本の小学校教師が登場した明治以来の時間軸と空間軸の中でとらえたいというのがその主旨である。現在の教師をめぐる課題を検討するに当たって、教師個人の資質や能力の問題としてだけでなく、文化とも言うべき小学校教師特有の思考・行動様式をも考慮することの重要性を指摘する。

わが国において職業人としての教師が誕生した明治期から現在に至るまで、小学校教師（ここでは公立学校教員を指す）は、さまざまな視点でもって語られてきた。教育の変遷は同時に、教育論や教師論の変遷でもある。理想の教師像や期待される教師像は多種多様であり、時代は絶えず新しい教師像を要請し、教師かくあれかしと提言を繰り返す。

時代や社会の要請を受けて、注目されてきた教師たちは、変わることを余儀なくされる。おもてに現れた教師のすがたは、時代の価値観を反映した、期待される教師像と一致してゆく。外からの基準を受容したありようである。変化の激しい現代にあっては、一時代の中においてさえ、教育観の転換と、それに伴う教師像の変換が起こり得る。教師は、教師人生の途上において、異なる教育観や教師観への方向転換を求められることにもなる。

しかしながら、教師にとって“観”の転換は、それほど容易なことではない。みずからの意志でなく、外部からの要請によって、変更を余儀なくされる場合は、なおさらのことである。突如として降りかかるこれらの難問に対して、果たして教師たちは、みずからのありようを如何に受け止め、外部の基準と教師個人の仕事や生活とをどのように折り合いをつけながら日々営んでいるのだろうか。現在、教師の精神疾患による休職者数の急増が、新聞報道を通して盛んに伝えられる。多くの教師が、教師を取り巻く環境に適応できていない状況がうかがわれる。教師として生きてゆくことは決してたやすいことではない、と推察される。

教師文化と呼ばれるものがある。教職の遂行にまつわって形成・継承される、教師たちに特有の様式的な職業文化として定義されるものである。教師として生き抜くことが容易

ではないとするならば、ここに、教師の個人的な資質や能力の問題に帰するだけでは解決されない、教職という職業経験から形成される、教師特有の思考・行動様式が存在するのではないかという仮説が成立する。教師文化に対する関心がにわかに浮上する。

現在において、教師の存在そのものを主題とする教師研究は、「今この時」の教師とのかかわりを重視する研究方向へ移行している。学校教育を取り巻く状況が刻々と変化を続ける中で、「研究対象である教師がもはや、かつての教師研究が共有し得た、一般性の高い静的な枠組みをとおしてとらえきれなくなった」からである。時間においては「今この時」＝現在に、空間においては日常の活動場所である学校や教室＝「ここ」に、しかも教師の間近＝「そば」に集約される傾向をもつ現在の教師研究は、「リアリティ」には富むものの、現在の教師を相対化して理解しようとする視点は、総じて乏しくなる。

本論文は、日本の教師たちに特徴的に見られる教師文化と呼ばれるものの存在を仮定し、小学校教師の思考と行動を内側から規定している様式をさぐりたい、という問題意識から始まった。「今日ほど」、「かつてないほど」と強調される現在の教師をめぐる課題や状況が、確かに現在固有の問題なのか、あるいは現れ方や程度の違いはあるものの、その本質は、過去の教師の問題を引き継ぐものであるのかを確認しようとする。

この論文は7章から構成される。

第1章では、日本の小学校教師がそれとして目で見ることが難しい、教師文化の存在を仮定するに足りる、どのような教職遂行上の諸状況に直面しているのかという研究の背景を述べたうえで、研究上の問いかけを設定し、本論文の構成を説明した。

第2章では、本研究における重要な概念である「学級経営」を定義した。すなわち学級経営とは、「学級レベルにおける、教師の教育活動のすべてを対象とした、学級教育の内容充実を図るための教育経営」である。学級経営という言葉は日常的に用いられているにもかかわらず、教師や研究者の間で必ずしも共通の理解が成立しているわけではないと言う。そこで、まず、わが国における学級経営概念に関する諸説を整理した。その結果、一般に学級経営の領域と機能は、教科外活動である生活指導や学級の条件整備に限定され、教科指導としての授業が考慮されていない場合が多いことを示した。続いて、明治後期におけるわが国最初の学級経営論（澤正の学級経営論）を詳細に検討した。澤の学級経営論は、学級担任教師の教育活動のすべて（当時における教授・訓練・養護および学級事務）を領域とし、その機能を学級教育の内容充実に求めるものであった。地域や学校、学年、学級の実態や特色を生かしつつ、学級における教育課程の編成と実施を志向していたのである。

このことからわが国最初の学級経営論は、現在言われるところのカリキュラム（教育課程）思想にもとづく教育経営であったという新たな提案を行った。

第3章では、教師文化の存在とその具体的様相をすくい集めるための基礎作業として、小学校教師を登場人物とする日本の近現代文学作品を、時代を追って、通史的に検討することを試みた。その結果、明治期から現代までを通じて共通して認められる教師の状況と、その状況から引き出される教師の特質を6つの観点から提示した。いずれの観点からも、正と負の相反する特質が認められた。さらに、これらの特質が、学級経営に与える影響について論じた。教師の特質が柔軟性に欠け、硬直化した学級経営につながる可能性があるのはどのような場合であるかを検討した。その結果、教師の特質のうち、とりわけ、負の側面が強調される場合において生起することが確認された。柔軟性に欠け硬直化した学級経営に陥る可能性を有する教師像は、教師が内部にもつ基準や価値よりも、外部の基準や要請に自分自身を合わせることを支えとして奮闘する教師であろうとまとめられた。教師がみずからの特徴や傾向を自覚し、教育行為を振り返ることは、学級経営上の失敗を未然に防止する有用な手段となり得る。教師の自己評価（形成的自己評価と総括的自己評価）の有効な活用を提案した。

第4章では、文学作品の分析を通して引き出された諸特質が、現実生活における教師の思考と行動に反映されているのかを見極めようとした。文学作品の分析結果を質問項目とする量的調査の結果から、現在の小学校教師の思考と行動の様式は、2つの類型としてまとめられた。第1は、「教育志向型」である。充実感ないしは消耗感を伴いながら、教育を志向する群であった。第2は、「外部承応型」である。充実感や消耗感と、必ずしも関連をもたずに、他者からの期待に応えることを目標として、教育活動を遂行する群であった。

第5章は、量的調査結果の裏付けを求めることを主眼として、自由記述内容の質的検討を行った。その結果、前章で認められた「教育志向型」の教師たちの中に、充実感を伴いつつ教師の仕事を肯定的に語る群と、消耗感を伴いつつ問題把握的に語る群が確認された。このことから「教育志向型」に属する教師を2つの下位型に分類した。第1は、「内部志向型」である。教師内部に充実感を伴いつつ教師の仕事の本質的な価値に従って教育活動を行おうとする群である。第2は、「内部と外部の葛藤型」である。教育を重視しながらも、外部の要請や期待である校務を優先させてしまうことによって、消耗感を伴いつつ、結果として教育への関与を後退させてしまう群である。

第6章は、第3章、第4章、第5章の結果を総括した。現在の小学校教師の生き方は、

大きく「教育志向型」と「外部承応型」とに二分される。さらに「教育志向型」の教師の中には、「内部志向型」と「内部と外部の葛藤型」という2つの下位型が認められる。このうち、明治以来の文学作品において典型的に認められる教師の生き方は、「内部と外部の葛藤型」である。それゆえ、現在をも含む、小学校教師の思考と行動の様式を「内部と外部の葛藤型」としてまとめ、その様式が学級経営のあり方を方向づける潜在的な要因となることを指摘した。

わが国においてはこれまで、さまざまな教師像が語られてきたが、今なお小学校教師の思考と行動を内側から規定している教師像は、公僕としての教師像であろうと推察できる。教師が他者との間に何らかの葛藤を生じた場合には、思考においては教師内部にもつ基準や価値を希求しながらも、同時に、行動においては外部の基準や価値が優先される傾向が認められる。理念と実際あるいは思考と行動の分離や不一致が、おそらく、教師の消耗感を誘発させるのではないかと考えられる。また、本論文を通じて検討された、教師の仕事に内在される種々の次元を異にする二面性が、教師の葛藤の要因であるがために、解決の困難な問題であろうことが推測される。

本研究は、実証的な教師研究に歴史的な視点を加えることによって、現在の教師を近代日本の小学校教師の系譜上に位置づけて、相対的にとらえようとした点に独創性を有する。現在の教師をめぐる問題は「今この時」の問題であると同時に、明治以来継承されてきた問題でもあると理解することによって、その本質が見えてくるのではないかと期待される。